

## 聴き合い、読み合える子どもを育てる

### — 新年度に向けて

#### 1 ベテラン教師の「学び合う学び」への挑戦

ベテラン教師になればなるほどそれまでの授業を変えることは困難です。それは、これまでの授業を壊す必要があるからです。まず、壊すことへの抵抗感が生じます。次に、その抵抗感を乗り越え新しい授業に変える決意をしたとしても、どうしても身につけてしまっている過去のものが頭を出してきてしまうということがあります。そして、どうにも思うようにならなくなってしまいます。しかし、その壁をこえたとき、若い教師が憧れだけで生み出した授業とは比べものにならない密度の濃い授業が生まれます。それは、ベテランになってから変えようとする強い意志がそうさせるのですが、これまでにどんな授業をしてきたとしてもそれがそれなりの経験になっていることも大きいのです。

A小学校のCさんはベテラン教師です。この一年の最後のわたしの訪問日に、そのCさんが特設授業をしました。その授業で、彼は、同僚が驚くほどの変身を遂げたのです。授業後の協議会で、ある人が言いました。

「子どもたちに語りかけるC先生のおだやかな語り方は以前と少しも変わりません。けれども、昨年度に見せていただいたC先生の授業とは全く違っていました。とにかく子どものことばを、持ち前のおだやかさでしっかりと聴いておられました。頑張られたのだなあと感じました。」

このことばは、ベテランになってから、授業を変えようと挑戦したCさんへの賛辞以外のなにものでもありませんでした。

子どもたちは、実に意欲的に自分の考えを述べました、次から次へと。Cさんは、それらの子どもの発言にほとんど口を挟みませんでした。協議会で彼は、「これまでだったら、いくつもの子どもの考えに口を挟んでいた」というようなことをおっしゃっていましたが、そのことばが示すように、彼は、強い気持ちで、子どもの学び合いに託そうと決めていたのです。それを全うしたCさんの意思の堅さは見事でした。

もちろん、授業の転換はたやすいことではありません。教師にとっては、長年やってきた授業を変えるわけですから、それは一朝一夕で成し得ることではありません。子どもにしても同様です。けれども、こうして一歩踏み出すことが大切なのです。この一歩がなくては何事も始まらないのです。そういう意味で、一歩を踏み出したCさんの勇気はたいしたものです。しかもその挑戦を、その学校のすべての教師が目にしたことに大いなる意味があります。

## 2 学びを生み出すために

Cさんのクラスの子どもたちは、よく発言しました。教師は不必要なことばを挟まず、よく聴きました。子どもの考えから学びをスタートさせるという点で、このCさんの行為は間違っていないと思います。にもかかわらず、聴き合い学び合う授業特有の、授業後半の「学んだ！」という充実感が出てこなかったのです。わたしは、その原因を考えることで、Cさんの、そして、A小学校のこれからの課題がみえてくると思いました。

協議会で、A小の先生方が述べたのは、主に次のようなことでした。

この日取り上げられたテキストは「ごんぎつね」（新美南吉）という物語で、この日の場面は、ごんが兵十につぐないを始める3の場面でした。Cさんは、そういう行為に及ぶごんの気持ちを考えさせたいと思っていました。しかし、ごんの気持ちとは言っても、麦を研ぐ兵十を見ているとき、いわしを投げ込んだとき、坂の上から振り返ったとき、次の日に栗をかかえて兵十の家に行くとき、いわし屋にぶんなぐられた兵十を見て、次の日も、また次の日もと栗や松茸を持っていくとき、と、それは微妙に変わります。そのため、子どもたちはよく発言したのですが、それらのどこの気持ちを述べているのかで考えが異なり噛み合わなくなったのです。つまり、学び合いが起こらなかったのです。

その打開策として、子どもの学び合いを尊重する気持ちはわかるが、今の段階では、教師がもう少し出て方向づけをしなければいけないのではないかと、そもそも3の場面全部を本時の場面にしないうで、坂の上で振り返るまでの前半だけにすればよかったのではないかとということが語られました。もっともな意見でした。この意見を受けて、どういう教師の出方が考えられるか、場面を前半だけにすればどうということになったかを、わたしは具体的に話しました。けれども、それだけでは、「学び合う学び」にはなっていないとも思いました。それは、ここで出された意見は、すべて、教師がどうすればよかったかという発想だったからです。

「学び合い」は、子どもが行う行為です。子どもたちが互いの考えを聴き合い、擦り合わせ、それぞれが自らの学びを深める行為です。ですから、そのとき教師がどうすればよかったのかという発想だけでなく、子どもがどう育っていればよかったのかという発想を忘れてはいけません。しかし、この日の授業のどこで学びが生まれたのか、どこで学びが滞ったのかを検討しなければと考えている教師たちには意識外のことだったと思われる。それで、協議の後、わたしは、この「育てる」ということについて具体的に話をしました。

育てなければいけない大切なことは二つあります。一つは、聴き合える子どもにすることです。そして、もう一つは、物語を読み深めるという観点から、ことばに触れて読み描くように読めるようにすることです。この二つが育っていれば、教師がどうこうしなくても、子どもが聴き合って、ことばに即してかなり読んでいくこともできます。

わたしが、協議会で「育てる」という話をしようと思ったのは、この日の研究会が、本年度の最後のものであり、そこには、次年度への方向を探るという目的が据えられていたからです。「育てる」という行為は、時間をかけて、子どもの状況に合わせてじっくり取

り組まなければいけないことです。それをするには、新年度を2か月後に控えるこのときがチャンスだと思ったのです。わたしの話を契機に、4月から取り組んでもらえたら、きっと「学び合う子ども」が育っていくと思ったからです。

### 3 聴き合える子どもが育つために

聴くという行為は受動的なものと考えているうちは学び合いにはなりません。能動的な聴くにするという発想が大切です。

だれかの考えが耳から入ってきます。もちろん目からも話す子どもの表情や身振りが入ってもきます。そのとき、その考えがどういうものかと受け取る聴き方をしなければなりません。たとえ、自分の考えと異なるものであっても。

たとえば、だれかが麦を研ぐ兵十を見たときの気持ちを語ったとします。そのとき自分は、次の日に粟を持っていくときのごんの気持ちを考えていたとすると、自分の考えは、それはそれで置いておいて、いま出てきた考えに寄り添って考えてみなければなりません。あの子の考えは、どういう考えなのだろうか。

そのうえで、自分が考えていたこととの擦り合わせをします。それは二者択一的なものではありません。そうすると、この場面のごんの気持ちの動きがみえてきます。つまり、擦り合わせによって、考えに何らかの作用が起きるのです。

すると、そこで生じた考えをみんなに投げかけてみたくなります。もちろん、いちいちそれを話す必要はなく、さらに考え続けていくこともよいことです。でも、もし、そこで生まれたものを投げかけたとすると、それは、聴き合いということになるのではないでしょう。

聴くということはそういうことだと、年度の早い時期に子どもが了解したら、その年度の後半、子どもたちはどんな聴き合い、学び合いを実現するのでしょうか。そう考えてほしいのです。

もっと具体的に言うと、だれかの考えが出たとします。それが、それまでにだれもが言わなかったことだったとします。そのとき、次々と発言させるのではなく、この一つの考えに対して、

「みんなにはそれぞれ自分の考えがあるだろうけど、それはそれでちょっと置いておいて、Uさんが言ったことはどういうことなのか考えてみよう」といざなってみるのです。

一人ずつじっくり考えさせます。場合によっては、ペアやグループで考えさせてもいいです。そうしておいて、どう思ったかを聴いてみます。そして、

「友だちの考えを聴くということは、そういうふうにすることなんだよ。一つひとつ、いまの考えはどういう考えだったのか、受け取るということなんだよ。だから、自分の考えを言おう、言おうとばかり考えていると聴けなくなるね」と話すのです。

けれども、これで終わりにしないで、もう一つ子どもたちに投げかけてみるとよいことがあります。それは、

「こうしていまのUさんの考えを受け取りました。さて、そこで、その考えを自分はどう

考えるのか、それを考えてみるのです。何か自分の考えのあった人は、その考えと比べたり、つなげたりできるかもしれませんが。これまでよくわからなかった人は、Uさんの考えをどう思うのか、自分にきいてみるといいです」

と言って、またじっと待つのです。今度は、グループにはしないほうがいいです。これは、一人ひとりの自分との対話なのですから。

ある程度の時間を経て、子どもたちにその考えを尋ねてみるといいでしょう。挙手した子どもだけでなく何人もの子どもに尋ねるほうがいいです。そのとき教師は、その考えを共感的に聴くことです。「そういうふうに聴いて考えたのか、いいなあ」というような表情で。

そして最後に、

「『聴く』ということは、今のようにすることなんだ。今は、いちいち先生がこうしようと言ってたけれど、それをその時その時、先生に言われなくてもみんなの頭の中ですると、『聞く』が『聴く』になる。そして、最後に、Uさんの考えを聴いて生まれた一人ひとりの考えがわかったけれど、それを自分から話してくれるようになったら、ものすごく素敵な『聴き合い』になるよね。先生は、このクラスを『聴き合い』のできるクラスにしたいと思っているの。これから一年、そういう聴き方をみんなで磨いていきましょう」

もちろん、これは、一つの例です。こういうふうにしなればいけないということではありません。また、こういうことを一回行えば、できるようになるというものでもありません。けれども、「能動的に聴く」とはどうすることなのか、その具体を示さないで、「聴きなさい」と百回言っても聴ける子どもにはならないのです。

#### 4 ことばに触れて読める子どもが育つために

読むことも同じです。「しっかり読みなさい」と百回言ってもことばに触れて読むという読み方は身につけません。

「学び合う学び」による物語の読みは、子どもの読んだことを出し合い聴き合う学び方になりますが、聴き合うとはどういうことか、読むとはどういうことかが身についていない子どもにとっては、どうしてよいものやら困ってしまうのではないのでしょうか。それをそのままにして、初めから「みんなの考えを出してください。それをしっかり聴いて、学び合しましょう」と言ったとすると、それは形だけのことになってしまう危険性があります。ですから、「聴くこと」と同じで、「読むこと」についても、まずは、どう読めばよいのかを学ぶ必要があるのです。

わたしは、年度当初に初めて出てくる物語で、それを実行していました。

たとえば、物語冒頭のある一節を取り上げ、次のようなことを行ったのです。それが4年生だったとして、最初の物語「白いぼうし」を例に述べてみます。

わたしは、「みんなの考えをきかせてください」というような切り出し方はここではしません。むしろ、わたしが問いかけます。

「『これはレモンのにおいですか。』と運転手さんに話しかけたお客さんは、どんな顔でどんな言い方をしたのでしょうか」

「タクシーでお客さんが運転手さんに話しかけるということはあまりないのだけれど、こ

のときはどういうことだったのかなあ？」

「じゃあ、お客さんになったつもりで話しかけてみようか」

「その話しかけに、『いいえ、夏みかんですよ。』と松井さんは答えたんだけど、どんな顔で、どんな言い方をしたのでしょうか」

「では、そういうお客さんと運転手の松井さんのやりとりの様子が浮かんでくるように、ここを音読してみよう」

わたしが心がけていたことは、文学を読む基本は、読み描くこと、そして、ことばに触れるように考えること、この二つでした。初めから「気持ち」を考えないということが鉄則だと思っていました。ですから、お客さんと運転手の松井さんの顔と話し方をまず考えさせたのです。もちろん、そのとき車内に充満していた匂いも想像する必要があります。そして、そのときの二人のことばを音読するようにしました。様子を描いて、声に出すことでことばに触れる、それを実行したのです。こうして子どもは、「レモンのにおいですか。」の「か」の微妙な言い回しに気づきます。

また、お客の紳士の表情は書かれていませんから想像することになりますが、松井さんの表情は、「にこにこして」と書かれています。しかし、そのことばは教師からは出さないうで、お客さんと同じように「顔は？」と尋ねるようにしました。子どもが「にこにこ」に気づくように仕向けたのです。そのうえで、『いいえ、夏みかんですよ。』という松井さんのことばを音読させると、「いいえ」という否定のことばに含まれる松井さんの気持ちが自然と感じ取れてきます。こうして、「気持ちは？」と問わなくても気持ちが浮かび上がるという体験をさせたのです。

学年当初にこうした読み方を経験するということは、その一年に読む物語の読みを決定づけるのではないのでしょうか。もちろん、この一回だけで、そうなるとは思えません。わたしは、この物語の中盤で、ある一節を取り上げ、次のように子どもたちに投げかけたいと思います。

「これまで、先生がいろいろと考えてほしいこと、やってほしいことを言って、みんなにそれを考えたりやったりしてもらいました。・・・それでね、今日は、ここのところ（と言って、その一節を指摘します。そして、その一節を印刷したプリントを配ります）で、これまでのことを思い出しながら、自分で考えたり音読したりしてほしいのです。できるかなあ？」

「できるかなあ？」などと言われると、「やってやろうじゃない」と思うのが子どもです。きっと子どもたちは、「できるよ」「任せて」などと言ってくるでしょう。もしそうでなかったら、「きっとできる。みんななら」ときっぱり言うことです。そうしたら、

「じゃあ、やってみましょう。考えたことは、どんなことを考えたのかがわかるように、プリントに印刷してある文の横か下に書いておきましょう。音読をしてみたくなったら、ほかの人の邪魔にならないようにして声に出してよろしい。では、チャレンジしてみよう」

これは、後に、「書き込み」につながります。けれども、ここでは、あえて「書き込み」などとは言いません。そういう用語を先行させればさせるほど、子どもは、難しそうに感じるからです。なんでもないこと、だれでもできること、楽しそうなこと、などと感ずることが大切なのです。

こうして子どもたちは、読み描くこと、ことばに触れることという二大鉄則を体験的に学ぶことができるのです。そして、この時点でも、教師がやらせることから自分でやってみることへの移行を実施しているように、次第次第に、教師がやらせることを減らして、子どもが自分で考え出すように仕向けていくのです。そのとき大切なのは、教師の思惑に合うものを待つ気持ちをなくすようにすることです。それよりも、子どもたちはどう読んでくるだろう、どこに関心を示すだろうと、子どもの読みに寄り添う気持ちを持つことです。そうすると、子どもの気づき、発見の素晴らしさがみえてきます。その子どもへの期待感、信頼感がないと、「学び合う学び」が生まれません。

もちろん、これはすべて一例であって、このようにすればよいと述べているわけではありません。具体的な事例をあげるとマニュアル的に受け取られる恐れがあり、それを避けることが多いのですが、今回はあえてこのようにしました。どうか、皆さん自身の創造的な取り組みにしてください。わたしの事例はそのためのきっかけに過ぎません。

## 5 子どもを育てる教師に必要な「見通し」

ここでわたしが述べていることは、すべて教師に「見通し」があって実現します。「見通し」のない教師にはこれはできません。「見通し」があれば、一つひとつ、一日一日の子どものすがたが、どういうステップを踏んでいるものかがみえます。みえれば、次に何をすればよいかの判断がつきます。もう少しこのことを繰り返す必要があるとか、今度はこういうことに取り組むようにしようとか、それがわかります。

わたしたち教師の仕事は、ある一つのプログラム、マニュアルに当てはめていくことではありません。子どもの状態に合わせてクリエイティブに行うものです。しかし、クリエイティブとは言っても、「見通し」がなければ生まれません。もちろん、「見通し」はマニュアルのことではありません。

では、「見通し」が持てるようになるにはどうすればよいのだろうかということになるでしょうが、それは一朝一夕に身につきません。研究と経験が必要だからです。あわてず、でも、怠らず、研究を心がけ、経験を積んでいくことです。自分の成長を、やや長いスパンで見定め、そして、小さな成長を確かめていくのです。大きな成長を考えすぎると、挫折したり、全く形だけのものにしてしまいかねません。

Uさんの挑戦が示すようにA小学校の今後は、大いなる期待が持てます。そういう学校を訪問し、先生方の挑戦にかかわれる喜びを感じます。

わたしの本年度の学校訪問はあと5校を残すのみとなりました。本年度もたくさんの教室を訪れ、先生方と子どもたちが作り出す授業の世界に触れることができました。ありがたいことです。

これから一か月半、各校は、本年度の締めくくりに入ります。そして、来年度はすぐそこです。A小学校をはじめとする各校の来年度に心から期待しています。